

# 紅葉托奇花

----まえがき

「私は初めて中国へ行ったので、中国の景色に衝撃をうけました。日本の大学と比べて違うところを見つけました。中国の大学は大学の敷地内だけで生活をすることができます。日本の大学では大学敷地内で生活すること普通できません。大学敷地内だけで生活ができるほど大きい中国の大学に驚きました。中国の大学のいいところは留学生寮の中に教室があるところ。外に出る必要がないので雨に濡れず部屋から教室が近いです。勉強するには最高の環境だと思います。なにより中国の大学の食堂は大きくかついろんな種類の食べ物があります。だから毎日食べていても飽きません。」

小泉香里さん、十九歳の女の子が偶然ある番組を見たことで中国語を学ぶ趣味を持ち、西安への短期留学をしたときの感想です。その後、専門学校を卒業し、中国語を学ぶために大学に入学しました。将来の目標は、中国の古い建築の研究に従事することだそうです。

「私は新学期が始まって2週間ほど経ってから中国に来たので、同じ班のほかの留学生よりリスニング力が相当低く、先生に「大丈夫ですか？テープを貸しますからコピーして聴いてください」と言われました。あの授業のときは自分だけができなくて泣きそうでした。それ以来私は毎日テープを聴いて、1ヵ月後くらいにほかの留学生に追いつくことができました。」

鈴木信昭さん、もともと中国には特別興味がない大学一年生でした。父親が仕事の関係で私と知り合い、余暇の時間に働きもせず遊んでばかりの子供を心配し、私に息子に中国語を勉強させることを相談したことから中国語を勉強し始めました。思いがけないことに日本の大学の学業を中止してまで中国の大学へ留学しました。今では中国の普通の大学生と一緒に授業を受けていて、将来は日中貿易事業で働こうと志しています。

「上海から常州まで車で移動するが、高速道路の両側に果てしなく広がる田畑には驚かされる。自動車でも2時間余り走らせるも、何と山のかげらも見当たらない。ここは地平線だけが見える大平原なのだ。狭くて山に囲まれた環境で育った日本人にとって、この果てしなく広がる広大さは、心に強烈な印象と精神的インパクトを与える。このような広陵たる国土を有する中国は征服し難く、中国は大きな龍であり、眠れる獅子という諺が頭をよぎる。」

太智重光さん、ゴムに関する技術の専門家です。仕事の関係でよく出張で中国に行きます。よく観察し、よく考える方で、私たちに日本人の中国に対する様々な印象や感想をもたらしてくれました。

「昼食を食べ終えて三輪車を探しに戻った。道の端にバイク三輪車がずらりと、長い列を作って待機していた。運転手は皆男性で無表情にこちらを向いている。私は勇気を出してその中の一人に声をかけた「ちょっとお聞きしますが、国家大地の原点までいくらですか」。すると無表情の顔を崩さずに「2元」と答えが返ってきた。私は別の運転手の所に行き、同じ様に聞いた。同じ答えだったがその三輪車に乗る事にした。運転手は横縞のシャツの上にブレザーを着て、袖を捲り上げとてもモダンに感じた。目的地への道はとても狭く、揺れもひどい。振り落とされないように支柱にしっかりと掴まっていた。道の両側は一面トウモロコシ畑で収穫の真っ最中だ。途中トラクターが行く手を塞いでいた。運転手は黙って道をあけてくれるのを待って、通過した。」

60歳あまりの島貫久美子さん、情熱をもった日本のおばちゃんです。たった一人で中国で十五日も過ごし、彼女の日記に毎日の出来事と感想が詳細に記録されていました。

「中国での商売は、先ず友人となって信頼関係を作りその後から商売をする。これが中国で売買する重要な原則だと思う。そして信頼関係をうちたてるのにいっしょに食事をすることは重要な要素だ。」

企業経営者の遠藤俊一さんは中国企業との長年のつきあいの中での多くことを感じ取った。

中国での体験の他に、中国語を学び始めたきっかけや学習方法、生活の心得など様々な内容の文章が目の前に山となっている。この光景を目の前にして、非常に感激し、涙を流すことを禁じえなかった…

指折り数えてみると日本に来てから十三年になる。日本人に中国語を教えることも十二年になった。面している学生は大企業の中国語研修の方から、日中友好協会中国語研究会の方、高等学校の若者たち…などなど様々な学生がいる。しかし、目の前の文章を書かれた方々たちはこのような学生ではなく、時間を切り詰めて、私費で、四方八方からわざわざ中文之友中国語教室に個人授業を受けにやってくる学生たちである。

作文を書くことは私が一定以上の中国語の基礎がある学生に対して行う学習方法である。どの学生も基本文法や発音から学習を始めた。このようなことを習得してからどのように中国語を上達させるべきか。「活学活用」(生き活きと学び、実際に活用する)、これは私の口癖である。ではどのようにして活きた学問を行うのでしょうか。まず一字、一語の基本的な意味を理解すること、次に「举一反三」と「融会贯通」を目標とすべきである。「举一反三」とは、同類のものは一つ習得したのならば、すべて習得すべきであるという意味であり、「融会贯通」とは、物事的一方を理解したのならば、すべての角度から理解すべ

きだという意味である。本に沿って丸暗記を行うことを避けるべきだ。

例えば、教材の中にある「不客气」という一言は、場面によって様々な日本語訳がなされている。よく学生の頭を痛めるのはこの「不客气」とはいったいどういう意味なのかだ。一字ずつ理解していくと、「不」はいらぬという意味で、「客」は客人、「気」は気持ちである。それぞれをつなげると、「あれこれ気を使うことは不要、お客様のようにかしこまっていることは必要ない。」という意味である。こうやって理解すると、「谢谢」（ありがとう）と言われたとき、答える「不客气」とは「どういたしまして」「とんでもない」といった意味になる。「对不起」（すみません）と言われて答える「不客气」とは、「大丈夫です」「気にしないでください」といった意味になる。「不要客气」と言われたときの意味は、「遠慮しないでください」「ご自由にどうぞ」といった意味になる。プレゼントも受け取ったり、ご飯をご馳走になるときに言う「那我就客气了」の意味は「では遠慮なくいただきます」となる。

もう一つ例をあげてみると、「你好」は最も基本的な単語の一つである。「你」は代名詞で、あなたという意味で、「好」は形容詞で良いという意味である。これをつなげてみるとあなたは良いですかと言う意味である。こうやって学習すると「こんにちは」という挨拶の言い方だけでなく、より多くのことが学べる。同時に中国語の慣習を学ぶことができる。「你」には日本語のあなたのような微妙な意味はなく、英語の「you」とほぼ同じように使う。だから中国人と交流するとき、日本でのようにすぐに名前を覚える必要はなく、その人の前で名前を呼ぶと反って不自然に感じられてしまうだろう。「好」を見ると日本人はまず動詞の好きを思い浮かべるでしょう。当然中国語でもこのように動詞で用いることはあるが、「好烟、好酒、好色」（タバコ好き、酒好き、女好き）のように使っており、一般的に良くない癖に対して使われる。動詞と形容詞の「好」の区別は四声によってされている。

などなどこのような例はたくさんある。これまでのことは「活学」について触れてきた。作文を書くということは「活用」の一つの形である。

一つの作文はまず自分の考えがなくてはならない。どのようにしても中国語で自分の考えを表現するか、これは教科書の文を丸暗記するだけでは解決できない問題である。これが中国語を実際に使うということである。自分の考えを日本語で整理し、翻訳を試みる。この翻訳の過程は非常に良い学習の過程である。分からない単語を回避することはできず、辞書を調べなくてはならない。日本語のある動詞を中国語の動詞に翻訳するとき、いくつもの動詞が候補にあげられる。これが日本語と中国語の違いの一つであり、日本語の動詞が表す動作の範囲は中国語の動詞の範囲と比べて極めて大きいからである。つまり、日本語は曖昧な動詞に形容詞で様々動作を表すが、中国語では様々な動作それぞれに動詞があるのだ。これは日本語が曖昧だと言われる原因でもある。中国語では動詞をぴったり使うことで、その文章を読んだ人の誰にもその場面を詳細に想像させることができる。このような文章を「生动、形象」と言う。作文を書く過程でこのような動詞の細かい使い分けが

徐々に身につけていくのである。

このような細かい使い方は実際にその動作をイメージできないとできないものである。そのイメージが分かれば、難しく考える必要がなく、実際にイメージに合う動作があったとき迷わずその動詞を使って問題ない。私はこのような動詞のイメージをととても大切だと考えて授業をしてきた。

書きたての作文には直訳的な表現を隠すことができない。これは日本語と中国語の表現方法や考え方の習慣の違いが反映されている。一つに、日本語の動詞は文の最後にあるのに対して、中国語では主語の直後にある。また、日本語は受動的な表現が多く、中国語は主導的な表現が多い。ここからそれぞれの文化の違いが見受けられるだろう。教師による添削はつまるところこのような直訳的な表現を発見し、直すことである。添削を繰り返して受けることによって、自分の間違いやすいところ、注意しなければならないことなどを発見する過程となる。作文を書くことによって、最初の草案から最後の文章までに修正を繰り返さなければならない。この過程で二つの文化の差異を深く理解できるようになるのである。これは実際に中国語を使う能力が上達する過程なのである。

一つの作文をあまく見てはならない。苦勞の結晶であり、学生と教師がともに勉強した足跡でもある。本を制作するに当たって編集者にまえがきを書くように言われたとき、一つの遠い昔の記憶が思い浮かんだ。「紅葉托奇花」である。

あれは八十年代のことである。あの年の夏、私は一人の青年の漫画愛好者として、中国全国漫画家協会開催の漫画創作交流会に参加した。華君武先生、丁聡先生などといった有名漫画家に会えるとあって私にとって幸運であり幸せであった。行く途中で、サインをもらうために一冊のノートを購入した。もらったサインの中で、林積令先生が書いた「紅葉托奇花」という言葉が私にとって一番忘れがたいものとなった。

「紅葉托奇花」という言葉は林先生にとって、偶然の思いつきかもしれない。しかし、この言葉は私にインドの詩人ラビンドラナート・タゴールの名言を思い出させる。「花の生涯は幸せで、果実の生涯は貴重で、しかし私は葉の生涯をおくるようにしよう。葉はいつも謙虚で木陰に垂れている…」葉の生涯は教師へと喩えとしては最高の賛歌である。

花の美しさが好きでない者はない。果実の瑞々しさが好きでない者はない。しかし、葉の奉仕があって初めて花の美しさと果実の瑞々しさが生み出される。葉の生涯は奉仕の生涯であり、敷石の生涯であり、ロウソクの生涯である。

私と夫はともに教師出身である。家族や親戚ほとんどが教職に就いている。私は教職を尊敬し、愛している。ごく普通の一枚の葉のような生きがいを持ちたい。知識と教養による「光合成」で、より多くの学生が美しい花や瑞々しい果実になれるように、一つ一つの話、動作、微笑などによって葉の生涯を体現していきたい。

よく言われる言葉に「緑葉扶紅花」がある。では、「紅葉托奇花」は「名師出高徒」という風に理解できる。今では「名師」とは言えないが、「名師」に近づけるように頑張っていきたい。すべての学生が私の授業でたくさんの収穫と進歩を得られることを願っている。

「教学路漫漫其修遠兮、吾将上下而求索」（教学の道はまだまだ長く、より良い教学方法を絶えず探索していくべきだ。）

「世界で最も広大なのは海洋で、海洋に比べて更に広大なのは空で、空に比べて更に広大なのは人の心だ」私が異国で教壇の前に立ち、期待しているのは知識の伝達だけでなく、異なる民族の心の交流とお互いの信頼を得ることである。平和の光が宇宙をすべて照らすことを願っている。

読者の皆様、あなたと出会えたことはこの本にとって幸せです。この文集の作者たちは理想、考え方、そして行動によって良い明日を実現しようとしている者たちです。彼らは普通の会社員であったり、会社の役人であったり、大学生や主婦であったり…こういった異なる職業、経歴、視角、体験が作文中の様々な内容や思想に反映されています。これらの身近な人々の体験や考えを知ることは日中間の言語学習、文化交流、相互理解において格別な価値があると信じています。

あなたが少しでもこの本から収穫が得られれば幸せです。

紅葉 2007年夏休み西安に於いて